待遇意識からみた「～てくれる」系表現と「～てもらう」系表現
―恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識を中心に―

熊田　道子

【キーワード】　配慮意識　働きかけ　当然性　負担の程度　既往・未然

0．はじめに

「～てくれる」「～てもらう」の異同については、既に様々な観点から多くの分析が成されている。構造・意味の観点からは、宮地（1965）・Masuoka（1981）、ムードの観点からは堀口（1984）、認知の観点からは沼田（1999）、丁寧度の観点からは井出他（1986）などが挙げられる。筆者は熊田（2000）において、井出他（1986）の調査によって明らかにされた両表現の丁寧度の違いに焦点を当て、待遇意識という観点からの分析を行った。そして、両表現の差異を引き起こす要因を探り、それらを考察の枠組みとして提示した。その大枠は、「恩恵の与え手に対する待遇意識」と「恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識」とに二分される。熊田（2000）では、このうち「恩恵の与え手に対する待遇意識」の考察を行った。本稿においては「恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識」を中心に考察を進める。

1　井出他（1986）の調査

井出他（1986）は、日本人とアメリカ人の敬語行動に関する調査を行い、大学生に「あなたが誰かと話していて、その人がペンを持っているとします。そのペンを借りたいとき何と言うでしょうか」という質問をした。そして設定されている２０の表現に対して５段階の丁寧度で答えさせた。その結果、表現に対する丁寧度の意識として「貸していただけませんか」の方が「貸してくださいませんか」よりも丁寧だと感じ、「貸してもらえませんか」の方が「貸してくれませんか」よりも丁寧と感じているという調査結果が出た。

このような両表現における丁寧度の違いは待遇意識に反映される。そこで、待遇意識からみた両表現の使用判別に関わる要因の枠組みを以下に提示する。[*1]

*1 ただし、待遇意識からの使用判別というのは、両者の使用判別における第一義的なものではなく、構造・意味などの下位項目としての存在であると考える。

2、考察のための枠組み

—「～てくれる」「～てもらう」の使用判別に関わる要因—

「～てくれる」「～てもらう」は、共に恩恵の受け手側に立ち、恩恵の受け手が、恩恵の与え手の行う（行った）行為に対して感謝の念を示す表現である（宮地 1965）。そこで、恩恵表現が成り立つためには、恩恵の与え手・恩恵の受け手・恩恵行為という三者が必須要素となる。そのため、恩恵の受け手が恩恵の与え手から恩恵行為を受ける（受けた）ことを明言化する場合、話し手[*1]の意識は待遇意識との関わりという観点から[*2]、大きく分けて次の二つを意識すると考える。一つは「恩恵の与え手に対する待遇意識」であり、もう一つは「恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識」である。

2－1　恩恵の与え手に対する待遇意識

①　恩恵の与え手と受け手との人間関係

待遇意識を考える際に、筆頭に挙げられるものは、恩恵の与え手と受け手との人間関係であろう。例えば、同じ話題を取り上げる場合、あるいは同じ表現意図を伝えようとする場合であっても、相手が友人の場合と上司の場合、あるいは家族の場合と見知らぬ人物の場合とでは、表現の選択などに大きな差が表れる。そのため、恩恵の与え手が恩恵の受け手にとってどのように遇するべき人物であるかによって、その言表態度には違いが出てくることが考えられる。

②　発話の場における恩恵の与え手の在・不在

また、眼前では敬語を使用する相手であっても、相手の不在場面では敬語の使用が行われないことがあるということから考えて、発話の場に恩恵の与え手が存在しているかどうか、言い替えれば恩恵の与え手が発話を聞いているかどうかということも、話し手の言表態度に何らかの影響を与えることが考えられる。

2－2　恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識

③　恩恵行為に対する恩恵の受け手側からの働きかけの有無

---

*1「～てもらう」系表現「～てくれる」系表現においては、発話者自身が恩恵の受け手となる場合だけでなく、第三者が恩恵の受け手になる場合もある。その場合でも恩恵の与え手と恩恵の受け手は発話者から見て同等にあるのではなく、話し手の意識は恩恵の受け手側にあり、発話者は恩恵の受け手に共感する形で発話を行っている。（小池 1992）

*2 待遇意識という観点からの分析であるので、ここでは雨のような自然現象等が恩恵の与え手となるものは考察の対象から外した。

「働きかけ」とは、恩恵の受け手が自らの意志を持って恩恵の与え手に働きかけ、恩恵の与え手の恩恵行為を引き起こしたことを表す。恩恵の受け手が恩恵の与え手に対し、恩恵行為を要求するということは、恩恵の与え手に恩恵の受け手のための負担を負わせることになる。そのため、「働きかけ」がある場合、恩恵の受け手に対する配慮意識は高まる。一方、「働きかけ」がない場合、恩恵行為は恩恵の受け手側からの要求によって行われるものではない。従って、「働きかけ」がある場合に比べ、恩恵行為に対する配慮意識は低くなると考えられる。

④　恩恵の与え手が恩恵の受け手に対し、恩恵行為を行うことに対する当然性

当然性とは、一般的な通念から計り、恩恵の与え手が恩恵の受け手に対して恩恵行為を行うことが当然であるかどうかという観点のことを指す。恩恵の与え手が恩恵行為をすることが当然であると見なされれば、当然性は高くなり、本来する必要のないことを行うような場合、当然性は低くなる。恩恵の与え手の行う恩恵行為の当然性が高ければ、恩恵を受ける側からの恩恵行為に対する配慮意識は低くなる。一方、当然性が低ければ、恩恵行為に対する配慮意識は高くなると思われる。

⑤　恩恵の与え手が恩恵行為を行う場合に生じる負担の程度

負担とは、一般的な通念から計り、恩恵の与え手が恩恵行為を行うに当たり、その行為を行うことに対する負担の大きさのことである。負担の程度が大きければ、恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識は高くなり、負担の程度が小さければ、恩恵の与え手が恩恵行為に対する配慮意識は低くなる。このような差によって、話し手の言表態度に異なりが出てくることが推測される。

⑥　発話時から見た恩恵行為の既往・未然

発話時に恩恵の与え手の恩恵行為が既に行われたものであるのか、それともこれから行われるべきものであるのかということも、話し手の言表態度に影響を与える一因と考えることができよう。それがまったく同じ行為であるとしても、一年前に行われた恩恵行為に対して言及するのか、それとも今から行われようとしている行為に対して言及するのかによって、話し手の言表態度が異なることが推測される。

以上、「～てくれる」「～てもらう」の使用判別に関わる要因として、話者がこれらの授受表現を使用するに際し、待遇意識との関わりから言表態度の決定に影響を与えると思われるものを6挙げ、考察の枠組みを示した。このうち「恩恵の与え手に対する待遇意識」は、熊田（2000）において既に分析を行ったので、以下4でその結果を示し、本稿では「恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対す

る配慮意識」の分析を中心に進める。

3　分析に際して

ここでは、待遇意識という観点からの分析を行うため、「～てくれる」「～てもらう」という補助授受動詞のみの厳密な抽出による差異よりも、これらを含む表現が会話の中でどのような役割を担うのかということに焦点を当てる。そこで、本稿においては、「～てくれる」「～てもらう」に含まれ得るモダリティなども含めて「～てくれる」系表現と「～てもらう」系表現と呼ぶことにする。

調査対象は、筆者が実生活において見聞きしたもの２３例、及び、テレビ（ドラマ・バラエティー・ドキュメンタリーなど）から採取したもの６１例、シナリオから採取したもの１３３例の、計２１７例である。内訳は「～てくれる」系表現１４１例、「～てもらう」系表現７６例[*1]となった。

4　「恩恵の与え手に対する待遇意識」[*2]

①恩恵の与え手と受け手との人間関係

ここでは人間関係を「待遇意識をそれほど働かせなくてもよい相手」と「待遇意識を強く働かせるべき相手」に二分した。「待遇意識をそれほど働かせなくてもよい相手」とは、家族や友人など自分と近しい関係にある相手、また、恩恵の受け手が上の立場で恩恵の与え手が下の立場、つまり恩恵の方向性が下から上へとなる場合、そして、恩恵の与え手が企業や全く見知らぬ人物などの場合である。一方、「待遇意識を強く働かせるべき相手」とは、恩恵の受け手が下の立場で恩恵の与え手が上の立場、つまり恩恵の方向性が上から下へとなる場合、そして、恩恵の与え手と受け手の関係が、あまり親しくないけれども人間関係を良好に保たなければならない職場やマンションの人間同士であったり、テレビのレポーターと出演者などの関係である場合である。

分析の結果、「～てくれる」系表現の 90%以上が「待遇意識をそれほど働かせなくてもよい相手」に使用されていること、また、「待遇意識を強く働かせるべき相手」に対しては「～てもらう」系表現の使用比率が高いことから、これらが両表現の使い分けに大きな影響を与えていることが推察された。

②発話の場における恩恵の与え手の在・不在

「～てくれる」系表現と「～てもらう」系表現の使用に、数値的にはあまり差

---

*1「～てくれる」系表現「～てもらう」系表現の敬語として「～てくださる」「～ていただく」が存在するが、これらには敬意の方向性の問題が加わるため、基本的には今回の調査対象には含めなかった。

*2 熊田（2000）より

が見受けられなかった。ただし、これらが原因とみられるいくつかの用例があったことから、これらは両表現の使用判別に何らかの影響を与えている可能性があると思われる。

この結果からの推察として、待遇意識からみた両表現の使用判別は、一つの要因によって決定されるわけではなく、枠組みのところで示したいくつかの要因が絡み合いながら両表現の使用を決定していると考えられる。

5　恩恵行為に対する配慮意識　―③「働きかけ」の有無―

ここでいう「働きかけ」の有無とは、Masuoka（1981）が「～てもらう」の下位分類としたCausative Benefactive（使役的恩恵）とPassive Benefactive（受身的恩恵）に相当する。Masuoka（1981）はagentが働きかけを行う場合（主語[*1]が自らの意志を持って出来事を引き起こす場合）をCausative Benefactive、そうでない場合をPassive Benefactiveとした。本稿ではCausative Benefactiveの方を「働きかけ」がありとし、Passive Benefactiveの方を「働きかけ」がなしとする。

恩恵の受け手が恩恵の与え手に対し恩恵行為を要求するということは、恩恵の受け手の意志により、恩恵の与え手に恩恵の受け手のための負担を負わせることになる。そのため、「働きかけ」がある場合、恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識は高まる。一方、「働きかけ」がない場合、恩恵行為は恩恵の受け手側からの要求によって行われるものではなく、恩恵の与え手側の自主的な行為によるものとなる。従って、「働きかけ」がある場合に比べ、恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識は低くなる。このような「働きかけ」の有無は話し手の言表態度に違いを引き起こすことが推測される。

「～てくれる」系表現

「～てくれる」系表現の場合、１４１例のうち文そのものが「働きかけ」の性質を有しているものが５２例あった。[*2] そのため、分析対象は残りの８９例となった。

恩恵の受け手が恩恵の与え手に対し、「働きかけ」を行った時に使用されたも

---

*1Masuoka（1981）は、「～てもらう」についてのみ記述を行っているので、「主語（subject）」という表現を使用しているが、本稿においてはその範囲を「～てくれる」にまで広げているため、「主語」ではなく「恩恵の受け手」として考える。

*2 本項目では、以下の分析において、「～てくれる」系表現、「～てもらう」系表現自体の「働きかけ」をみることを目的とするため、文そのものが、「ペン取ってもらえる？」「ペン取ってくれる？」のように依頼や命令などの「働きかけ」の性質を有しているものは分析の対象から省いた。

のが２６例（29.2%）、「働きかけ」を行っていないときに使用されたものが６３例（70.8%）あった。

「～てもらう」系表現

「～てもらう」系表現の場合、７６例のうち文そのものが「働きかけ」の性質を有しているものが３７例あった。そのため、分析対象は残りの３９例となった。

恩恵の受け手が恩恵の与え手に対し、「働きかけ」を行った時に使用されたものが１９例（48.7%）、「働きかけ」を行っていないときに使用されたものが２０例（51.3%）あった。

両者を比較すると、「～てもらう」系表現の方は「働きかけ」を行っているものが50%以上とほぼ半数を占めているのに対し、「～てくれる」系表現の方は30%程度しかない。「～てもらう」系表現が「～てくれる」系表現に比べて「働きかけ」性を有していることは、先行研究によって明らかにされているが、この結果もそれを裏付けるものである。

（例１）「働きかけ」あり[*1]

直子と浦山と谷川は中学の同窓。直子は小さなスナックを経営している。直子の店を谷川と浦山が訪れている。

谷川「浦山。おまえ、よく来てんのか」

浦山「……まあ、たまにだ。同級生の店だし」

谷川「律儀だなお前は。それとも何か下心でもあったりしてな」

直子「何言ってんのよ。私が無理言って、来てもらってるのよ」

谷川「お前も同級生当てにして商売するなよ」　　（シナリオ「コキーユ」）

直子は谷川が浦山に向けて言った「何か下心でもあったりしてな」という言葉を打ち消すために、「私が無理言って」と自らが浦山に対し「働きかけ」を行ったことを強調している。

（例２）「働きかけ」なし

未知子と敬子は友人。未知子は突然敬子の花屋を訪れる。

敬子　「あれ、みっちー」

---

*1 以下、それぞれの要因と関わりがある例を示すが、「恩恵の与え手に対する待遇意識」のまとめの部分でも述べたように、それぞれの例はただ一つの要因によってのみ両表現の使用判別が決定付けられているのではなく、いくつかの要因が絡み合うことで使用判別が決定付けられている。そのため、取り上げた例は決定要因の一つとしてその項目が働いていることを示しているものである。

未知子「(笑顔で) ご無沙汰」
敬子　「いつ帰ってきたの？」
未知子「おとといの夜」
敬子　「何だ、前もって言っといてくれればいいのに」
(中略)
敬子　「あ、もう行かないと。ごめんね、ほんと、せっかく来てくれたのに」
未知子「ううん」　(シナリオ「火星の我が家」)

ここでは、未知子が敬子に事前の連絡をせず、突然やってきたことが、敬子の「何だ、前もって言っといてくれればいいのに」という言葉からうかがわれる。

(例3)「働きかけ」なし
三津子と忠春は夫婦。忠春が深夜帰宅すると、三津子が食事の支度をして待っている。
三津子「あ、ご飯は？」
と立ち上がり、忠春のご飯茶碗を持つ三津子。
忠春　「いらないよ。(テーブルの上を見て) あーあ、またこんなに、立派に支度してくれたんだ……いいっていってるのに……」
三津子「だって……。お風呂は？」
忠春　「いい……とにかく、一秒でも早く眠りたいよ」
(シナリオ「おしまいの日」)

忠春の「いいっていってるのに」という言葉から、食事の支度が忠春の希望によって行われているのではないことがわかる。

このように、恩恵の受け手から与え手に対しての「働きかけ」がない場合、「～てくれる」系表現の方がよく使用される。恩恵の受け手が恩恵の与え手から受ける恩恵行為が、恩恵の受け手からの「働きかけ」で行われる場合と、恩恵の与え手自身の意志などにより、恩恵行為が行われる場合とでは、恩恵の与え手に対する受け手側の待遇意識は異なり、それが、「～てもらう」系表現と「～てくれる」系表現の使い分けに影響を与えていると考えられる。

6　恩恵行為に対する配慮意識　―④当然性―

当然性とは、一般的な通念から計り、恩恵の与え手が恩恵の受け手に対し、恩恵行為を行うことが当然であるかどうかという観点のことを指す。恩恵の与え手が同じであっても、仕事の一環として恩恵行為が行われた場合や、恩恵の与え手にとって恩恵行為を行うことがほとんど義務と化しているような場合、当然性は高くなる。一方、恩恵の与え手が恩恵行為を行う必然性が全くないにも関わらず、純粋な好意からその行為を行なった場合、その当然性は低いものと見なされる。このような当然性の違いによって、話し手の言表態度には差が見られることが推

測される。

例えば自分の子供がけがをしてその手当を行うのは、親にとって当然性が高いと考えられるが、見ず知らずの子供がけがをしているのを見て、病院へ連れて行き治療費まで払うのは、当然性が低い行為であると考えられる。このような当然性の違いによって、話し手の言表態度には差が見られることが推測される。

「～てくれる」系表現

「～てくれる」系表現の場合、恩恵の与え手が恩恵行為を行う当然性が高い時に使用されたものが７４例（51.4%）、低い時に使用されたものが６７例（48.6%）である。*1

「～てもらう」系表現

「～てもらう」系表現の場合、恩恵の与え手が恩恵行為を行う当然性が高い時に使用されたものが２２例（28.9%）、低い時に使用されたものが５４例（71.1%）である。

当然性が低い場合、「～てもらう」系表現が７割以上使われているのに対し、「～てくれる」系表現は５割以下であり、「～てもらう」系表現が多く使用されていることがわかる。

（例４）当然性が高い場合
岸田が部下の女性社員と打ち合わせをしている。
岸田「これと、これと、これで一部だから」
女性「はい」
岸田「これ、作ってくれる？」
女性「何部作りますか？」
岸田「そうだなあ、百部ぐらい」　　（シナリオ「おしまいの日」）

上記のように、上司が部下に対して仕事を命じる場合、上司は部下に対してそのようなことを言う正当な権利を有していると一般的な通念から考えることができる。このような場合、その当然性は高くなり、恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識は低くなるため、「～てくれる」系表現が使用されやすい。このような職場の例で上司が部下に指示を与える場合、「～てくれる」系表現が使用されていることがほとんどだった。

---

*1 本項目と次の負担の程度に関しては、一般的な通念、及び文脈などから高低・大小が計りきれないものがいくつかあり、そのようなものは、数値の対象外とした。

（例５）当然性が高い場合

直子と浦山と谷川は中学の同窓。直子は小さなスナックを経営している。直子の店に浦山が上司を連れてやってくるが、上司はひどく酔っているので浦山はすぐ帰ることにする。

浦山「悪い。勘定してくれるかな」

直子、振り向いて

直子「え？もう帰っちゃうの？」　（シナリオ「コキーユ」）

店側の人間が勘定をするのは、極めて当然性の高い行為である。

（例６）当然性が低い場合

直子は、直子に恋心を抱く相馬と会う約束をするが、それを平介（夫）に気取られぬよう、アリバイ作りを友人の邦子に頼む。

直子が邦子に電話をしている。

直子「もしもし邦子。久しぶりい」

（場面転換）

直子「でね、邦子と会ってることにしてほしいんだ」

邦子「おっけー、了解了解」

直子「そっちからうちに電話入れてもらえるかな」　（シナリオ「秘密」）

実際会いもしないのに、邦子が直子の家に電話をかける当然性は低い。このような場合、二人は高校の同級生でかなり親しい関係であるにも関わらず、「～てもらう」系表現が使われている。

（例７）当然性が低い場合

忠春（保険の営業マン）が顧客に電話をかけている。

忠春「……結婚記念日おめでとうございます！そうです、坂田です。いやあ、声だけで分かってもらえるなんて光栄です。……あ、お花もう届きましたか。……いえいえ、大したものでなくて恐縮ですがお納めください。……はい、では、又改めて。……はい、失礼します」　（シナリオ「おしまいの日」）

この場合も、保険の顧客が営業マンの声だけで当人とわかるという当然性は一般的な通念から考えて低い。

以上のように、当然性が低い場合は恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識は高くなり、その結果「～てもらう」系表現の使用が多くなっている。一方、当然性が高い場合には恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識は低くなり、「～てくれる」系表現の使用が多いということが言えるであろう。

7　恩恵行為に対する配慮意識　―⑤負担の程度―

負担とは、恩恵の与え手が恩恵行為を行うにあたって、行為者にとって当該行為を行ううことに対する負担の大きさのことである。負担の程度が大きければ、恩恵行為に対する配慮意識は高くなり、従って、恩恵の受け手から与え手に対する待遇意識も高くなる。一方、負担の程度が小さければ恩恵行為に対する配慮意識は低くなり、恩恵の受け手から与え手に対する待遇意識はそれほど高くなくなる。　例えば、恩恵の与え手の恩恵行為が足元に転がった鉛筆を拾うことであるような場合、その負担の程度は小さいものと見なされる。一方、恩恵の与え手が自分も危険にさらされながら恩恵の受け手の命を救うような場合、負担の程度は大きいものと見なされる。このような差によって、話し手の言表態度に異なりが出てくることが推測される。

「～てくれる」系表現

「～てくれる」系表現の場合、恩恵の与え手が恩恵行為を行う負担の程度が大きい時に使用されたものが４５例（32.6%）、負担の程度が小さい時に使用されたものが９３例（67.4%）である。

「～てもらう」系表現

「～てもらう」系表現の場合、恩恵の与え手が恩恵行為を行う負担の程度が大きい時に使用されたものが３８例（50.7%）、負担の程度が小さい時に使用されたものが３７例（49.3%）であり、両者ほぼ半数である。

「～てくれる」系表現と「～てもらう」系表現を比較した結果、「～てくれる」系表現の方が負担の小さい場合に使われやすいことがわかる。つまり恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識が低い場合、より、「～てくれる」系表現が使われやすいことになる。

（例８）負担の小さい場合

三津子と忠春は夫婦。忠春は、前夜、酔って深夜に帰宅した。
翌朝、顔色の悪い忠春が、スーツ姿で階段を駆け下りてくる。
三津子「春さん」
忠春「三津子、いつもの通り起こしてくれなくちゃ。遅刻しちゃうよ」

（シナリオ「おしまいの日」）

妻が毎朝定時に起こしている夫を起こすことは、負担の小さい行為と考えることができる。

（例９）負担の小さい場合

瑤子と森島はテレビ局で働いている。瑤子は森島の部下。瑤子はビデオ画面の操作をし

ている。
ビデオ（局アナのナレーション）「……ある地方のテレビ局の株を買い占めました」
森島「送ってくれ」
瑤子「（操作）……」　（シナリオ「破線のマリス」）

上司がビデオ画面の操作のためにそばに控えている部下に向かって、ビデオを送るよう指示し、部下がビデオの操作をすることは、負担の大きな行為ではない。

（例１０）負担の大きい場合
母親（直子）と娘（藻奈美）が事故に遭い、娘の身体に母親の人格が乗り移ってしまった。しばらくして、娘と母親の両方の人格が交互に娘の体に現れるようになる。この場面は、母親が娘の進路志望を変え、医学部に入学した後、娘の人格が戻り、再び母親の人格が現れている場面である。（平介は直子の夫）
直子「あのね、あの子（藻奈美）のために情報ファイル作ったの」
平介「おっ」
直子「あの子さえよければ、このまま医学の道に進んで貰いたいな。授業もまだ概論的な講義がほとんどだから、藻奈美ならついていけると思うの」
平介「うん、そうだな」　（シナリオ「秘密」）

自分の意志に関わりなく、希望する学部とは全く異なる学部での勉強を行うことは、本人にとって非常に負担の大きいものと考えられる。

（例１１）負担の大きい場合
幼少期に両親と別れた女性が、育ての両親と実の両親についての思いを語る
女性「育てのお父さんとお母さんもすごくいい人で、立派に育ててもらったから感謝していますが、……」　（テレビ番組中のインタビューより）

実の子ではない子を大人になるまで育てることは、一般的な通念から考えて負担の大きい行為と見なすことができる。
上記の例のように、恩恵の与え手が行う恩恵行為が負担の程度の大きいものとみなされる場合、配慮意識は高まり、その結果、恩恵の与え手に対する待遇意識も高まる。このような場合、「～てもらう」系表現が使用されやすく、逆に負担の程度が小さいものである場合、恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識は低く、結果として待遇意識も低まる。このような場合、「～てくれる」系表現が使用されやすくなる。

8　恩恵行為に対する配慮意識　―⑧発話時から見た恩恵行為の既往・未然―

相手がこれから恩恵行為を行おうとしているのか、それとも既に恩恵行為を行ったのかによって恩恵行為に対する配慮意識は異なってくると考えられる。恩恵行為が未来に行われる場合、恩恵行為に対する配慮意識は強くなり、恩恵の与え手にたいする待遇意識は上がると考えられる。一方、恩恵行為が既に行われている場合は、恩恵行為に対する配慮意識は未来の場合に比べて弱くなる。そのため恩恵の与え手に対する待遇意識も下がると考えられる。

「～てくれる」系表現

「～てくれる」系表現の場合、既に行われた恩恵行為に対してに使用されたものが６６例（47.8%）、これから行われる恩恵行為に対して使用されたものが７２例（52.2%）である。

「～てもらう」系表現

「～てもらう」系表現の場合、既に行われた恩恵行為に対してに使用されたものが２１例（28.4%）、これから行われる恩恵行為に対して使用されたものが５３例（71.6%）である。

両者を比較した場合、「～てもらう」系表現はこれから行われる恩恵行為に対して使用されたものの比率が７割を越え、恩恵行為がこれから行われるときには「～てもらう」系表現が使用されやすいことがうかがわれる。

（例１２）

姉が出かける支度をしている。

妹「お姉ちゃん、渋谷行くんでしょ」

姉「うん」

妹「あのさー、悪いんだけどさー、ハンズで○○買ってきてもらえるかなあ」

姉「えー、自分で行きなよ」

妹「お願い。明日、どーしても使うの」

姉「えー」

妹「お願い」

姉「うーん……時間あったらねー」

姉が帰ってくる。

妹「ねえねえ、買ってきてくれた？」

姉「……あ、忘れちゃったー」

妹「うっそー、信じらんない。買ってきてくれるって言ったじゃん」

姉「ごめん。すっかり忘れてた」　（実例）

この例では、恩恵の行為者（与え手）・恩恵の受け手・恩恵行為共に、同じものであるが、恩恵行為が行われる前（未然）では、「買ってきてもらえるかなあ」

と「～てもらう」系表現が使用され、話し手が恩恵行為が既に行われたと思ったところ（既往）では、「買ってきてくれた？」と「～てくれる」系表現が使用されている。

これは、恩恵行為そのものが同じであっても、恩恵行為が行われる前の段階では、恩恵の与え手が行う恩恵行為に対する話し手の配慮意識が高くなり、既に行われたことに対しては話し手の配慮意識が低くなることと関係があろう。恩恵行為が行われる前の段階では、恩恵の与え手が行う恩恵行為に対する話し手の配慮意識が高くなることは、「買ってきてもらえるかなあ」という言葉の前に、「悪いんだけど」という前置きがあることからも窺われる。

一方、既に行われた恩恵行為に対しては、時の経過と共に相手が行った恩恵行為に対する配慮意識が捨象され、その恩恵行為が行われたということのみが事実として話し手の中に浮かび上がってくるため、恩恵の与え手が恩恵行為を行ったことに対する配慮意識が低くなり、その結果として「～てくれる」系表現が使用されやすくなると考えることができよう。

9　分析結果のまとめ

以上、本稿においては「恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識」を中心に調査検討を進めてきた。結果をまとめると以下のようになった。

恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識

配慮意識が低い方に使用される割合

	③働きかけ	④　当然性	⑤　負担	⑥　既往未然
～てくれる系表現	70.8%	51.4%	67.4%	47.8%
～てもらう系表現	51.3%	28.9%	49.3%	28.4%

配慮意識が高い方に使用される割合

	③働きかけ	④　当然性	⑤　負担	⑥　既往未然
～てくれる系表現	29.2%	48.6%	32.6%	50.7%
～てもらう系表現	48.7%	71.1%	50.7%	71.6%

表を見るとわかるように、恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識が低い場合、各項目とも「～てくれる」系表現の使用される比率が「～てもらう」系表現の使用比率よりも 20%程度高くなっている。一方、恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識が高い場合、各項目とも「～てもらう」系表現の使用される比率が「～てくれる」系表現の使用比率よりも 20%程度高くなっている。

以上の結果から、③恩恵行為に対する恩恵の受け手側からの働きかけの有無　④恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する当然性　⑤恩恵の与え手が恩恵行為を行う場合に生じる負担の程度　⑥発話時からみた恩恵行為の既往・未然　そ

れぞれの項目において、配慮意識の高い場合には「～てもらう」系表現が使用されやすく、配慮意識の低い場合には「～てくれる」系表現が使用されやすいことがわかった。この結果から、話し手は恩恵の与え手が恩恵行為を行う（行った）に際し、上記のような要因を配慮しながら「～てもらう」系表現と「～てくれる」系表現の使い分けを行っていると考えることができるであろう。

今回は紙幅の関係で「恩恵の与え手に対する待遇意識」と「恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識」との関係、及び、各項目間の関連性などについては述べることができなかったが、また、機会があれば、それらについても述べてみたいと思っている。

【参考文献】

宮地裕（1965）「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63
豊田豊子（1974）「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1
Takashi Masuoka（1981）"Semantics of the Benefactive Constructions in Japanese" Descriptive and Applied Linguistics,14.
奥津敬一郎・徐昌華（1981）「「～てもらう」とそれに対応する中国語表現」『日本語教育』46 号
堀口純子（1984）「「～テクレル」「～テモラウ」の互換性とムード的意味」『日本語学』Vol.6.No.4
井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
仁田義雄編（1991）『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
小池ユリ（1992）「日本語における授受動詞の意味」『横浜市立大学論叢・人文』43 号
木村一紀（1993）「日英語における使役・受身表現に関する考察—助動詞「れる・られる」「せる・させる」「てもらう」及び使役動詞 Have を用いた文の受益・被害性をめぐって—」『主流』54 号
西川真理子（1995）「「てくれる」についての一考察—「てやる／もらう」との比較から—」『言語文化研究』21 号
伊島正博（1997）「授受動詞文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』
蒲谷宏・川口義一・坂本惠（1998）『敬語表現』大修館書店
山田敏弘（1999）「テモラウ受益文の働きかけ性をめぐって」『阪大日本語研究』11
沼田善子（1999）「授受動詞文と対人認知」『日本語学』Vol.18.No.9
山崎幸子（2000）「「てくれる」の意味機能—「てあげる」との比較において—」『日本語教育』103 号
熊田道子（2000）「待遇意識からみた「～てくれる」系表現と「～てもらう」系表現」『早稲田大学文学研究科紀要』46 号第 3 分冊

（くまだ　みちこ／文学研究科日本語日本文化専攻　博士後期課程 2 年）